

自然の摂理に逆らう 千歳川放水路計画 滝川康治

世界でも例を見ない河川の逆流事業が、「最善の治水対策」の名の下にすすめられている。

日本海に注いでいる石狩川の水系でも特に水害に見舞われやすい千歳川の流域に、長さ三八・五キロにおよぶ水路を掘削して、洪水時に水位の關係で本流にのみ込めない千歳川の水を中間地点から逆流させて、太平洋に排出する、という「千歳川放水路計画」である（地図参照）。事業主体は北海道開発庁。ルート発表から一〇年目を迎える今年、道開発局は環境アセスメントに着手しようとしており、動きが急になっている。

昨年十一月、放水路計画に反対する市民グループが主催する公開シンポジウムが、苫小牧市内で開かれた。パネラーは、計画を批判している研究者と道開発局の担当者ら。こうした催しに開発局側が出席するのは、一年前

の札幌でのシンポ以来である。

「放水路の建設は自然の摂理に反する。馬追丘陵がゴルフ場に変えられたり、遊水機能をもっている河川敷をゴミ捨て場や水防訓練場のために埋め立てるようなことを放置しておいて、放水路をやるうとするのではバランスを欠いている」

と、小野有五北大教授（環境地理学）が放水路に固執する開発局を批判した。

「千歳川は、中流域が低くお盆のようになっていて。その水を太平洋に流す計画なのだから、「自然の摂理に反する」というのは、ちよつと違う」

道開発局の吉田義一企画官が、こんな言い訳めいた反論をした。さまざまな指摘に対して、開発局側は放水路の重要性を繰り返し、論議はすれ違いがめだった。

たきかわ・こうじ
一九五四年北海道生まれ。地方紙記者、酪農業などを経て、現在、フリーライター。著書「観延——核のゴミ捨て場を拒否する」（技術と人間）。

月刊自治研
93年3月号

会場からは、太平洋の漁業やラムサール条約の登録湿地になっているウトナイ湖への影響について、質問の声があがった。吉田企画官は、

「漁業への影響は難しいところがあるが、調査をすすめた。ウトナイ湖と美々川の間は重要な問題と考えており、放水路をすすめるが今の環境を守りたい。」

と、放水路と環境保全を両立させていく姿勢を強調して見せたが、そこで時間切れになった。

この計画は現在、道の要望を受けて、開発局がルートの変更を検討している。主催者側では、それが示された段階で改めて公開シンポジウムを開きたい、という。

自然の営みが生んだ地形を、近代的な土木技術によって無理やり変えてしまおう、というのが、この計画の思想である。放水路の呑み口と石狩川合流部の二カ所に水門、出口には潮止堰もつくる。南の長良川では、河口堰ひとつをめぐって全国的な論議を呼んでいる。それに比べ北の千歳川放水路は、まだローカルな話題にすぎない。が、調べるほどに長良川以上の大がかりな自然の改変であることが浮き彫りになってくる。

● 政治的色彩の濃い「ルート変更」

支笏湖に端を発する千歳川は、千歳市内の低地帯に入ると勾配が緩やかになる。恵庭市、広島町、南幌町をへて江別市内で道内一の長流・石狩川と合流するまで、緩

やかな河床勾配は四〇キロほどつづく。千歳川に流れ込んだ水は、合流する石狩川の水位が高いことから流下しにくく、洪水の影響を受けやすい。一八九八(明治三二)年から現在までに起きた、千歳川中・下流域の水害は合計四二回にのぼる(道開発局)という。

被害を広げたのは、流域の低地帯で遊水池の役割を果たしてきた長都沼の干拓が行なわれたのに加えて、石狩川のショートカット、ゴルフ場開発、減反による遊水池の低下などが急激にすすんだことが影響した。それは開発に対する自然の痛烈なしっぺ返しでもあった。

七五年、八一年の水害をきっかけに、放水路計画が浮上してきた。八二年に国の基本計画に明記され、のちに汚職事件で逮捕される稲村道開発局長官のときに、①美々川・ウトナイ湖を通る西ルート②遠浅川から苫小牧東部工業基地の北西部を通る中ルート③安平川筋に苫東基地内を通る東ルート——の三案が示される。総事業費は当時二〇〇億円、完成までに二〇年はかかるといわれた。八七年になると、開発局は「東ルートに絞って計画をすすめたい」と発表。着工に向けて翌八八年度から毎年、用地買収費を計上している。

が、地権者の酪農家らの同意が得られないうえに、工事による美々川流域の地下水脈の破壊や海域汚染を心配する自然保護団体や苫小牧漁協などの反発にあつて、着工は足踏み状態がつづいてきた。

昨年、計画は新しい局面を迎えた。「美々川源流部のルート」をさらに東側へ変更する」という方向で、道と開発局が事実上の政治的決着を図ったのである。

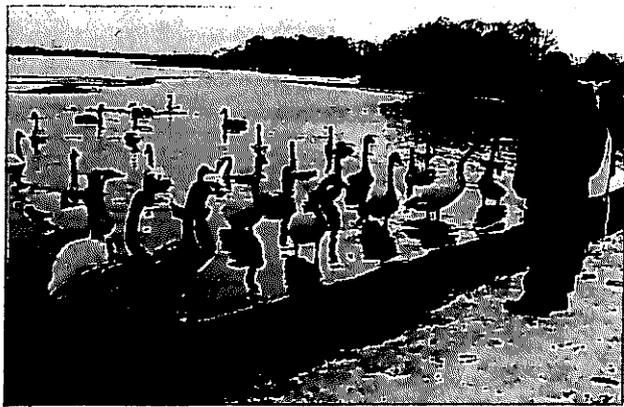
横路知事の選挙公約に沿って美々川流域の自然環境調査が行なわれ、道の調査検討委員会(座長・辻井達一北大農学部教授、九人)は「石狩低地帯の本来の姿を残す地域として、高い評価を与えるべき」とする報告書を発表(四月)。辻井座長は、「最善策は放水路をつくらないこと。計画と環境保全との接点はどこにあるのかを述べるのは難しい」という見解を示した。

道は、関係自治体や自然保護団体などから知事ヒアリングを行なう一方、「条件付き容認」を打ち出した連合北海道などの見解を受けて、「美々川源流部を迂回させるルート変更」を求める知事意見書を道開発局に提出(六月)。一連の経過は、「計画の修正」を表明することで道・開発局双方の面子を立てたものだが、道民には分かりにくい政治的色彩の濃いやり方だった。

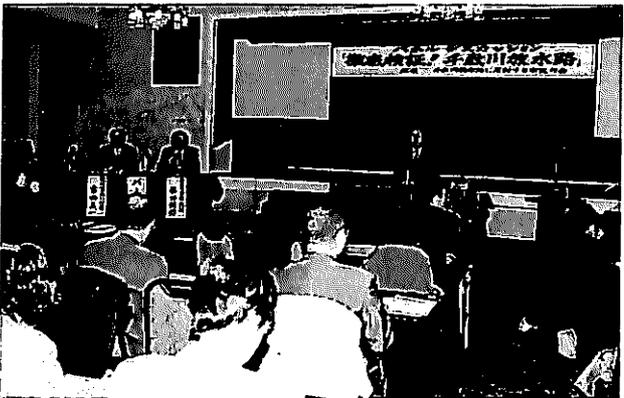
それは、足踏み状態の打開を狙った苦肉の策でもあったが、これまで指摘された疑問点は何ひとつ解消されていない。今春にも示される見通しの新ルートをめぐる議論が再燃することは必至である。

● 美々川流域の豊かな自然を直撃

支笏・恵庭・樽前の火山噴出物が降り積もった美々川



ラムサール条約の登録湿地に指定されているウトナイ湖。石狩低地帯に残された最大の湖だ。



苫小牧で開かれた放水路を検証するシンポジウム(92年11月)。議論のすれ違いがめだった。

周辺の丘陵地帯は、澄みきった地下水の涵養源である。新千歳空港のすぐそばの千歳湖付近とその東側の左支川からなる源流域は、丘陵から染みだす湧き水によって形成されており、豊かな自然が息づく。そのすぐ東側を巨大な水路が縦断する。掘削によって地下水脈が寸断されることは開発局も認めており、ルート変更をしても影響を避けられそうにない。美々川は、支流から水を集めながらヨシが生い茂る湿



ウトナイ湖に流れ込む美々川。放水路の掘削による地下水脈の寸断で、流域の環境破壊が心配。

原をゆつくり蛇行して、石狩低地帯に残された最大の湖沼・ウトナイ湖(面積二・四平方キロ)へと注ぐ。

この一帯は、八一年に日本野鳥の会によってサンクチュアリ(聖域)第一号に指定され、レンジャーも常駐する。ガンやカモ、オオハクチョウなどの渡りの大切な中継地であり、すでに二五〇種もの野鳥を観察済み。一昨年には、ウトナイ湖が国内四番目のラムサール条約登録湿地に指定され、国際的にも注目度を高めつつある。が、放水路の掘削は美々川の水位を低下させるために、野鳥の聖地にとって大きな脅威なのである。

チーフレンジャーの大畑孝二さんは、一〇年前にウトナイ湖にやってきた。初めは美々川の源流がどこにあるのかも知らなかったが、勉強するなかで危機感を強めた。反対運動にとっては欠かさない存在だ。

昨年は、東京で初のフォーラムを開いたりして、放水路計画を全国的なテーマにする節目になった。暮れには、大畑さんがソウルで開かれた国際鳥類保護学会のアジア大会に出席して放水路計画の中止を訴え、反対決議が採択されている。わたしが湖のほとりにあるネイチャーセンターに大畑さんを訪ねたのは、その大会から戻って間もないときだった。

「満場一致で採択された反対決議の重みを、政府や関係者がどう認識するかでしょうね。世論を盛り上げるのは、そういうことの積み重ねだと思う」

と力を込める大畑さんは、ルートの変更を土俵仕切り直しと受けとめていた。

「道(開発局に)引つ張り込まれた分だけ押され気味かなあ。でも、ルートが白紙に戻ったので美々川・ウトナイ湖の保全策すら煮詰まっていけない。わたしたちの当面の目標は、六月のラムサール条約国会議(釧路で開催予定)までに、「放水路は無理で、環境上やるべきでない」というふうな風向きを変えること。それに、放水路の促進地域(千歳川の中・下流域)で学習会などを開いていきたい。あとは粘りだと思えますよ」

ラムサール会議のある今年には、自然保護運動に取り組んできた大畑さんらにとって、正念場である。「生物の多様性を維持しようという機運が、国内外で広がりを見せている。昨年の地球サミットで一五六カ国が調印した「生物多様性条約」も、その表れだろう。

豊富な湧き水、溪流、蛇行、湿原、湖——延長一八キロほどの流域に、これだけのバラエティに富んだ自然環境がある場所は、北海道中央部では美々川をおいてない。ある研究者は「美々川流域こそ国立公園に指定すべきだ」と言ったが、ここはわたしたちが大いに誇っている地域だと思ふ。新千歳空港の国際化がすすみ、札幌圏への一極集中のひずみが広がるにしたがって、美々川流域の自然はますます高い評価を受けていくだろう。放水路計画は、そんな時代の流れにも逆行している。

● 太平洋の好漁場に、招かざる客

ふだんは流速一センチ/秒ほどの「水たまり」だが、四〜五年に一度、洪水時にだけ濁流が一気に放水路から太平洋へと排出される。が、そこは道内屈指の好漁場である。苫小牧漁協は、ホッキ貝の水揚げ高日本一を誇っている。

「ホッキは昔、前浜の漁業実行組合に漁業権の行使を一任してあったので、ほとんど管理体系がなくなってしまったんですよ。それが苫東開発をきっかけにして変わった。昭和五一年以降、全権限を漁業協同組合が握るようになって、いろいろな制限を加えたんです。この漁業はメインになるものがないので、それからは獲るノルマを決めて、食べることも全部禁止して増やしてきました。ホッキの管理関係については、わたしもだいぶ厳しくやりました。小形船が係留された港の脇にある漁協の事務所、三上稔参事からこんな苦勞話を聞いた。

ここに就職した三〇年前、組合は赤字再建団体に転落していた。下宿代が五〇〇〇円の時代に三上さんの月給は三八〇〇円。苫東開発に伴う漁業権の放棄にも立ち会った。川から流れ込んだ泥を船でかきおこしてホタテを蒔いていく「耕運事業」というのにも力を入れ、養殖も軌道に乗った。

現在の組合員数は一五一人。水揚げ高は、道内の漁協

でも一〇本の指に入るとか。流水の影響を受けることなく通年働けて収入も安定している。都会的な教育環境も整っている——そんなところに魅力を感じて、よそからやって来てここに居つく漁民も多いという。

漁民にとって、放水路は招かざる客といえる。関係者は、カレイやホッキ貝の産卵期に放水路から淡水が流入した場合、海水の塩分濃度が下がって浮遊卵が死滅したり、泥流によって沖合まで懸濁して漁場が破壊される……と危惧する。石狩川と千歳川を洪水時に切り離すのだから、道内全体のサケ・マス漁にも大きな影響を与える。洪水の多い秋は、サケの遡上の季節なのだから。昨年夏の洪水の泥流が太平洋に流れ込み、大量のホタテに被害が発生した。「泥流で貝は死なない」という開発局の主張は、全く根拠のないものだった。

苫東開発で漁業権を売り渡した苦い経験が、今でも関係者の脳裏から離れないようである。

「二万四〇〇〇ヘクタールもの日本でも類を見ないような漁場が、微々たる補償金で消滅したことを、今もって組合長以下むかしの役員連中は「ちよっと馬鹿なことをしたなあ」と言っていますよ。今回の放水路反対になっている大きな反省点でしょうね」

と、三上さんが言い切った。石油ショックで幻となった巨大開発、治水を名目にした放水路——いつも国家プロジェクトのツケを回されるのは、海からの恵みを生活

の楯にする人たちが。が、今回は黙ってはいない。胆振・日高地区の一七漁協は昨年夏、放水路問題の協議会を発足させて反対姿勢をいちだんと強めている。

● 治水のツケを回される苫小牧市民

放水路計画に対して、苫小牧市や早来町では慎重論が根強い。地域とは関係のない水系の治水対策を背負われる割り切れないが、そうさせるのである。

苫小牧の前市長は放水路の容認派だった。市の対応が変わってきたのは八七年、鳥越忠行現市長に交代してからだという。市役所内の四部局からなる検討委員会をつくって開発局に質問状を提出する一方、環境アセスメントをめぐり動きが活発化してくると、鳥越市長は「地元の了解なしに強行するなら、ノーと言わざるをえない」と言明。市議会も、酪農組合や自然保護団体から出された陳情を全会一致で採択して足並みをそろえた。

昨春秋、開発局と道、地元四市町（千歳、長沼、早来、苫小牧）でつくる「放水路連絡協議会」が発足した。ルート変更という情勢の変化を受けた集まりだが、建設を前提としたものにしよとすると、開発局、難色を示す苫小牧市などとの間で綱引きがあった。

「推進目的や決定の場にならない、ルート上の自治体に限定するなどの条件が満たされないと参加できない——と主張してきたんですが、協議会の規約のやりとりでは地元

に考える時間を与えないような、開発局のやり方でした。あれにはちよつと首をかしげてしまいましたね」
ひと月半におよんだ発足までの舞台裏を、同市の担当者がこんなふう振り返る。わたしには、道内の自治体の上に君臨してきた開発庁のおごりと焦りを象徴する話のように聞こえた。

市は昨年二月、五〇項目の要望（質問書）を石狩開発建設部に提出した。一年が経過して回答が返ってきたものの、焦点の美々川・ウトナイ湖の保全策など八項目は、「ルート変更案が公表されていない」との理由で回答が保留されている。

反対の声は、着実に広がっている。

自然保護団体が先行していた運動に地区労などが加わり、千歳川放水路に反対する市民の会（紀藤義一会長）が発足するのは九〇年春。ただちに白紙撤回を求める署名運動に取り組み、市民の約半数に当たる八万六〇〇〇人あまりから署名が集まり、手応えを感じとった。この動きに触発されて、市内の建設業団体などが推進団体を結成して、やはり同じくらいの署名を集めた。戸別訪問と企業ぐるみ——その手法は対照的だ。両方に書いた市民も多かったらしいが、署名の重みが違っていた。

同会事務局長の大西陽一さん（市職員）は、自治労の自治研推進委員長でもある。市職労は、七年前から放水路の疑問点を指摘していたが、治水と環境保全との間で

悩み、反対決議を採択したのは九〇年の定期大会。全組合員が署名集めをするなかで、苫東開発反対運動のときは違った市民意識の高まりを実感した、という。

一年前、自治研推進委員会は「千歳川放水路を検証する」と題する、B5判一六ページの冊子を発行した。

放水路計画の歴史と内容、影響、疑問点、水と人間のかかわりなどをまとめ、自然保護団体や農・漁業関係者の寄稿も載せた。わたしは、放水路を扱ったパンフ類なかで出色の出来ばえだと思っている。三〇〇〇部作成したが、引き合いが多く二〇〇〇部を増刷した、とか。

「よく知らないで賛否が論じられているので、分かりやすいものを作ろうとしたんですが、だんだん治水論まで膨らんでしまつて……。でも、素人がここまで作れた、という自負はあるんです」

と、いきさつを話す大西さんから自治研活動の歩みを聞くうちに、その理由がのみ込めてきた。

六〇年代初めに「市政白書」を作成したのを皮切りに、苫東開発の反対運動に取り組んだ。最近では、給食やリサイクル・ゴミ問題をテーマに論議を深めている。「執行部は干渉しない。討論に時間をかける」が基本姿勢で、それが説得力ある活動の原動力になっているとか。

苫東開発の破綻があったことも、環境問題を市民とともに考えていく下地になっており、わたしの目には地域に根を張った自治研活動の好事例のように映った。

● 埋蔵文化財の扱いがネックに

石狩低地帯の周辺には、縄文時代からアイヌ文化期にいたる遺跡が数多く分布する。放水路が着工されれば、埋蔵文化財の扱いが大きなネックになりそうだ。

千歳市内の「周知の遺跡」は、道内で二番目に多い。放水路との関連では、祝梅川（千歳川の支流）の上流部と美々川源流部の周辺で遺跡とぶつかる可能性が高い、という。ルート変更が取り沙汰されている遠浅川周辺は、大がかりな農地開発に伴う発掘調査が行なわれていないので詳細は不明だが、その可能性は捨てきれない。

「祝梅川上流は、市内でも有数の遺跡の集中地。川に近く、洪水が少なく、縄文人の生活環境として有利な地理的条件をそなえていた。湿地のために木製品が残っている可能性も高く、古代人の生活を復元するための情報量が集中している地域だろう」

同市の埋蔵文化財担当者は、この一帯の遺跡の特色をこう説明する。

が、事業主体の開発局と文化財行政を担当する道教委とが、放水路と遺跡の関係をめぐって話し合った様子はうかがえない。道教委文化課の担当者は、

「計画があることは聞いているが、（放水路の）具体的なデータはないし、まだ考える段階にない。放水路にかかわる発掘が大規模になるとすると、既存の埋蔵文化財

センターの拡充か、関西新空港に伴う土砂採取地の発掘調査のように関係自治体が協力するのか、いずれにしても、具体的な検討をしないものですか……」

と、白紙の状態であることを強調する。埋蔵文化財行政は、増えつつける調査の処理に忙殺され、とても放水路シフトを敷くだけのゆとりはないようだ。

その発掘現場に人材がなかなか集まらない。道教委の担当者も、こう言って嘆いていた。

「四月に道内二市町村で学芸員の採用を計画しているが、まだ五自治体しか実現していない。大学で考古学を教養として学ぶ人は多いけれど、仕事としてやる人が少ない。需給のバランスが崩れているんです」

行政発掘だが現場責任者は個人の資格、というアンバランスさ。発掘の仕事は地味で効率も悪いのに開発を焦る事業者側と、破壊されてしまう遺跡のデータを正確に記録にとどめようとする担当者との隔たりもある。

新事実が出たり、調査に関する技術も日進月歩なので、一人当たりの発掘対象面積も減少している、という。だから、市民に分かりやすい報告書づくりや出土品の展示までは、なかなか手が回らない。たとえば、新千歳空港の建設に伴う長期の発掘が行なわれているが、出土品を展示して道民に還元する作業は手つかずの状態らしい。

こんな現状なのに、放水路の建設で大がかりな遺跡にぶつかったら、どうするのだろうか。開発のひずみを受

けるのは、いつも現場の担当者や一般市民である。

● 代替案の議論と自然観の転換を

計画に批判的な研究者らによって、さまざまな代替案が示された。たとえば「遊水池機能の復活」がある。

「食糧不足の時代に埋め立ててしまった長都沼などを、遊水池として元に戻してはどうか。現在、あまり使われていない土地が八〇〇ヘクタールはある。きちんとした補償策を講じると条件の悪い土地で畑作をやっている農家も助かるし、湿原の保護との一石二鳥にもなる。こうした施策を日本が率先してやるなら、湿地が危機に陥っているアジア諸国にもいい影響を与え、世界的にも高く評価されるだろう」(小野有五氏)。

これに対して、開発局側は、

「堤防やポンプ場、道路の切り替えなど、やらなければならぬことに比べると効果が少ない。放水路と同じだけの効果をあげるには一萬ヘクタールが必要だ」(吉田企画官・冒頭のシンポジウムで)

と、にべもない。小野氏らが複合的な治水対策を提唱するのに対して、放水路単独の治水効果を強調して論議がかみ合っていないのである。

「放水路は、コスト・パフォーマンスが低すぎる」という高田直俊氏(大阪市大土木部教授・地盤工学)は、次のような問題点を指摘する。

農漁業、湿原、湖、文化財……と、放水路によって失われるものはあまりに大きい。しかも、開発行政の延命策のような工事が終わって、実際に使えるのは二〇年も先の話。そんな税金の無駄遣いをするよりも、ほかの治水対策をやったり、自然の営みを人為的にねじ伏せるような水との接し方を問い直してみてもどうかだろうか。

そのヒントは、アイヌ民族の自然観のなかにあるような気がする。千歳川の支流のひとつに、「日本の名水百選」に選ばれるほどの清冽さを誇るナイベツ川がある。そのほとりて生まれ育った中本ムツ子さん(千歳アイヌ文化伝承保存会長)が、憤りと悲しみを込めた口調でこんな話をしてくれた。

「木一本でも、石ころひとつでも、人間の力では作れないのだから、アイヌは家を直す木を伐るときにも神様をお願いをして、謙虚に暮らしてきたんです。昔からいるものを殺したり、騙したりして、北海道を分捕ってしまっただんだから、せめて大事に使ってほしい。洪水になる原因をつくってにおいて、『今度は放水路を』と叫ぶ前に、大きな視野に立って根本的に改善してもらいたい。嵐も水も目の仇にするんじゃないくて、神様の怒りとして受けとめるような精神を呼び起こしてね」。

畏敬の念をもって自然に接した精神文化のほうから、洪水の原因や水とのつきあい方を考えていけば、放水路計画の愚かさやわたしたちの歩む道が見えてくる。

①美々川の系水域には、井戸からの給水などが提案されているが、あまりにも未知要素が大きく、多額の工事費を考えると唐突な発想としか言いようがない。

②建設費は過少見積りて、中堅建設会社の技術者が試算したら三二五億円(土地代を除く)になった。

③掘削土量一・二億立方メートル(関西新空港の使用土砂の八割に相当)の運搬計画が示されていない。

そして、石狩川では河口部の開削や低水路の拡幅などを、千歳川では蛇行を直したりゴルフ場の規制、低地の住宅のかさ上げなどの治水対策を提案する。

が、開発局はこれら「洪水の抜本対策にならない」と一蹴して、あくまで放水路にこだわる。そこには、長期の延命策を見出そうとする焦りすら感じられる。

「世界各国の地域開発法のなかで、地域住民の生活向上をうたっていないのは、北海道開発法だけであろう」

と、三〇年あまり前に看破したのは民族学者の梅棹忠夫氏である。放水路計画でも、北海道に君臨してきた開発庁には、旧時代の発想で物事をすすめたり、道や地元自治体を見下すような姿勢が目立つ。多省庁にまたがる事業を手がけてきたノウハウを生かして、水害の常襲地帯には減反緩和と雨水の貯留能力を高めたり、流域の乱開発の抑制につながるソフト事業にこそ知恵を絞らなければ、信頼される開発行政への道は遠のくばかりだ。